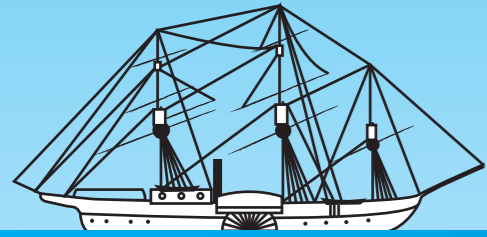


企画展 池田家文庫絵図展

日本と「異国」



平成 20 年度



岡山大学附属図書館
〒700-8530 岡山市津島中 3-1-1 TEL:086-251-7322
<http://www.lib.okayama-u.ac.jp/ikedai/>



岡山市デジタルミュージアム
〒700-0024 岡山市駅元町15-1 TEL:086-898-3000
<http://www.okayama-digital-museum.jp/>

平成20年度 企画展 池田家文庫絵図展

日本と「異国」

主催：岡山大学附属図書館・岡山市デジタルミュージアム

後援：岡山県教育委員会・岡山市教育委員会

ごあいさつ

岡山大学附属図書館・岡山市デジタルミュージアムは今年度も共同で池田家文庫絵図展『日本と「異国」』を開催することができました。

この展覧会は、岡山大学附属図書館が所蔵する、江戸時代の備前岡山藩池田家の藩政資料「池田家文庫」の実物を多くの地域の人々に見ていただくという趣旨で企画しており、岡山大学と岡山市との文化事業協力協定に基づき、平成17年度から毎年岡山市デジタルミュージアムで開催しております。

今年度は、江戸時代の「異国」とのつながりに注目し、世界図や日本図などの古地図、朝鮮通信史の接待に関する岡山藩の記録や、漂流して帰国した人々の記録などを公開しております。徳川幕府の鎖国政策のために、江戸時代の人々にとって海外の情報を知ることは非常に少なく、自国の地図さえも正確には眼にすることができませんでした。こうした近世の人々がどのように「異国」を考えていたのか、当時の「異国」事情を紹介します。

地域社会にとって、次世代を担う人材を育てることは大学の大切な使命であります。今年度の展示では、大学教育の一環として、日本史学を学ぶ学生が文献調査やパネル製作といった形で展示に参加しました。こうした試みは、これからの池田家文庫絵図展開催の大きな戦力になるとともに、地域の歴史を後世につなぐ契機となります。

本展の開催につきまして、これまでの皆様方からの多大なるご協力に深く感謝申し上げますとともに、今後ともなおいっそうのご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

平成20年11月1日

岡山大学附属図書館
館長 本水 昌二
岡山市デジタルミュージアム
館長 森 隆恭

目次

ごあいさつ	3
目次 凡例 関連行事	4
展示資料図版	5
総説	19
展示資料解説	21
展示資料目録	26
池田家文庫絵図展・記念講演会開催記録	27
謝辞	28

凡例

- この図録は、岡山大学附属図書館と岡山市デジタルミュージアムが平成20年11月1日（土）から11月16日（日）まで開催する企画展『池田家文庫絵図展 日本と「異国」』の図録である。
- 展示番号と本書の図版番号、展示資料解説、展示資料目録に付した番号は一致する。
- 展示資料のうち、本書に図版を掲載していないものもある。
- 本書に掲載した展示資料の写真は、岡山大学附属図書館が所蔵する絵図デジタル画像を利用、または岡山市デジタルミュージアムの撮影による。ただし、別機関より写真の提供を受けた場合は個別に提供者名を記している。
- 本書の総説・展示資料解説は、岡山大学社会文化科学研究科 倉地克直教授の執筆による。表紙・本文等デザイン・編集は、岡山大学学術情報部学術情報サービス課参考調査係職員による。

関連行事

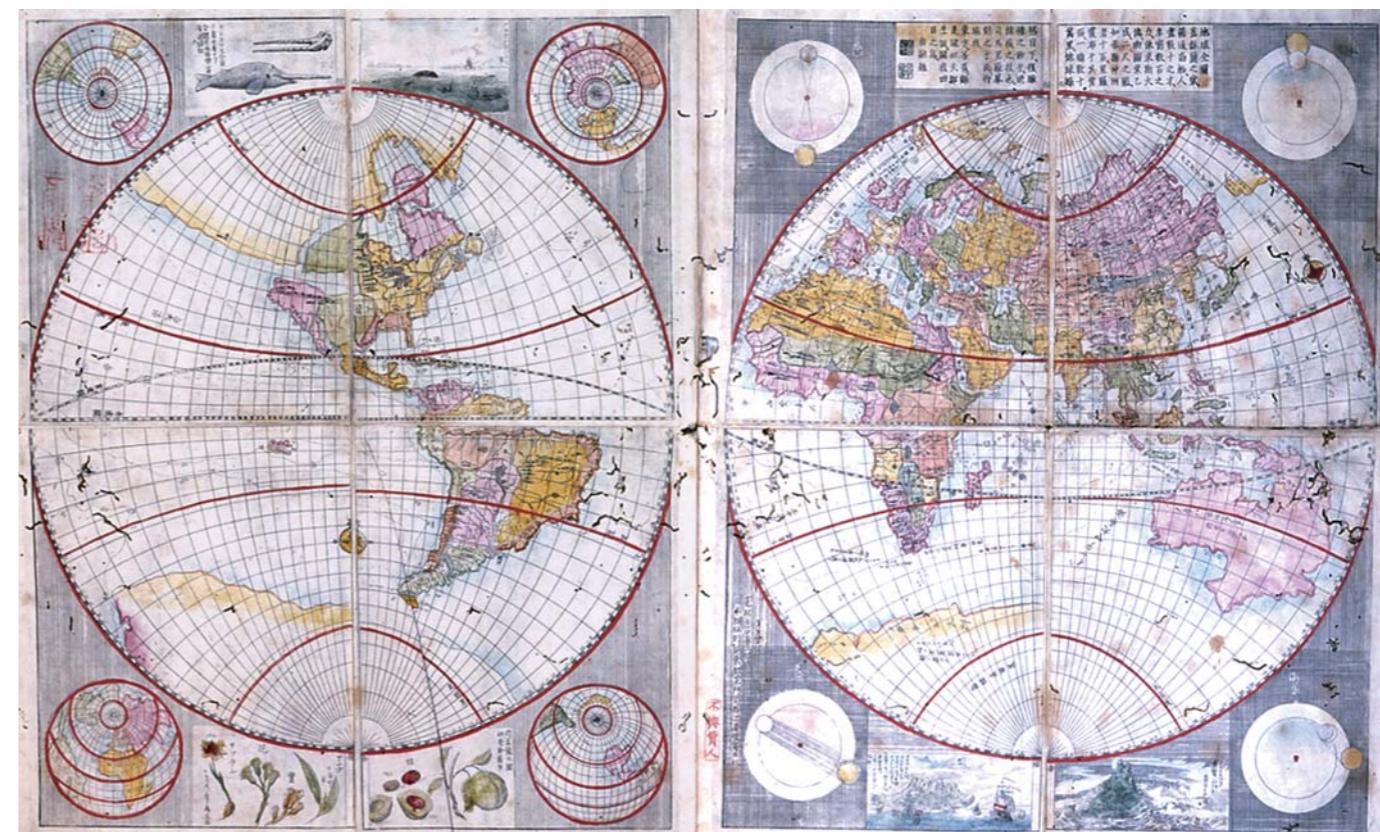
1 展示解説

解説： 岡山大学社会文化科学研究科 教授 倉地 克直
 日時： 平成20年11月1日（土） 10時～11時
 会場： 岡山市デジタルミュージアム 4階展示室

2 記念講演会

講師： 名古屋大学文学部 教授 池内 敏
 演題： 『「鎖国」の中の日本と朝鮮』
 日時： 平成20年11月1日（土） 14時～16時
 会場： 岡山市デジタルミュージアム 4階講義室

展示資料図版



1 地球全図 寛政4年(1792)

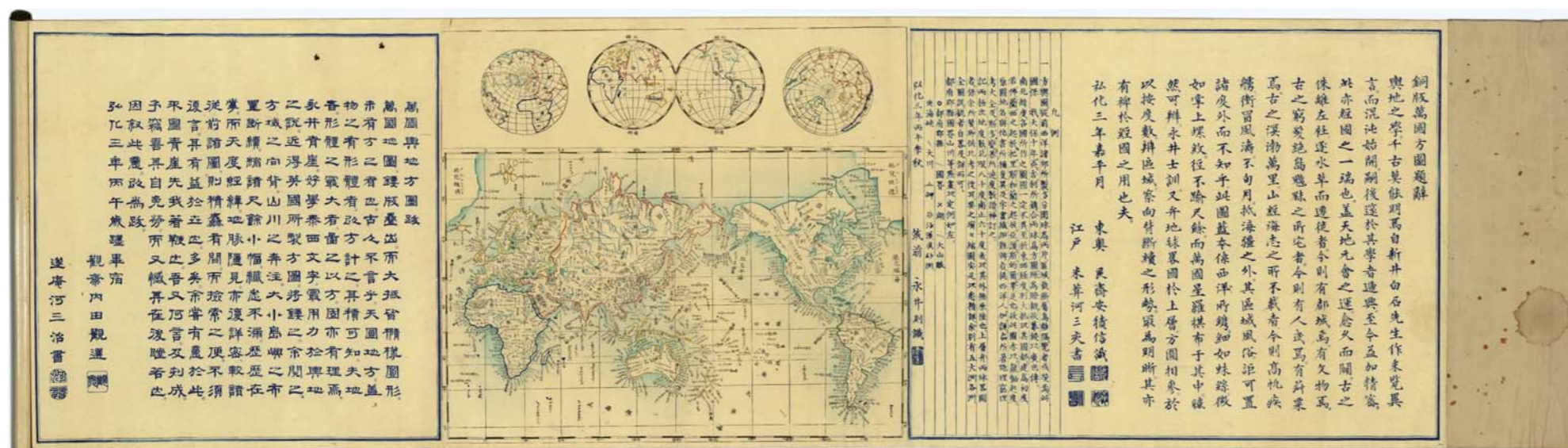


4 和漢三才図会 卷13・14 正徳3年(1713)

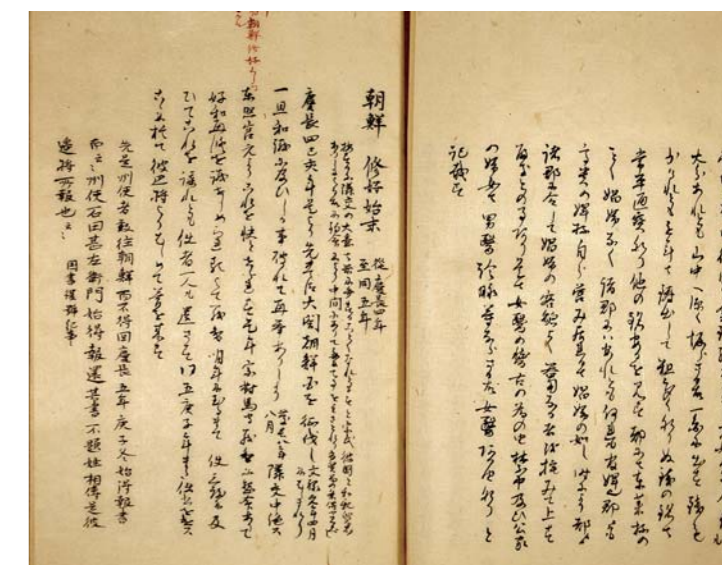




2 新製輿地全図 弘化元年(1844)



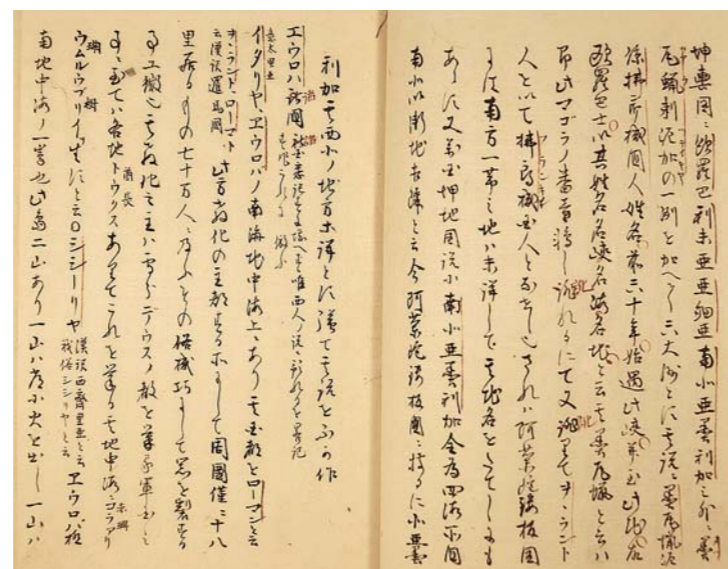
3 銅版万国輿地方図 弘化3年(1846)



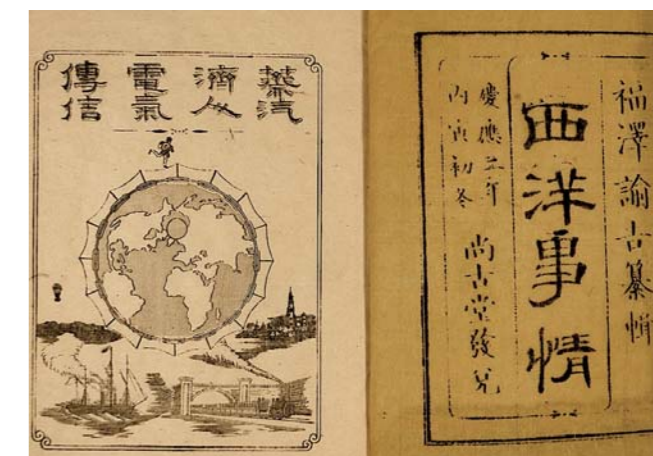
6 通航一覽 嘉永6年(1853)



5 西洋紀聞 正徳5年(1715)頃

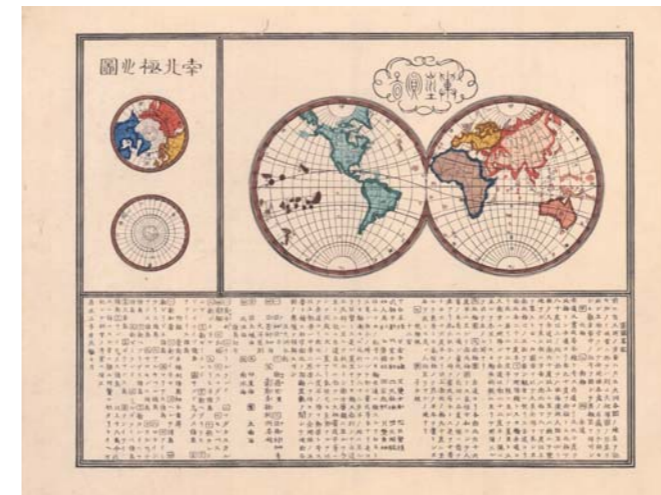


7 西洋事情 慶応2年(1866)

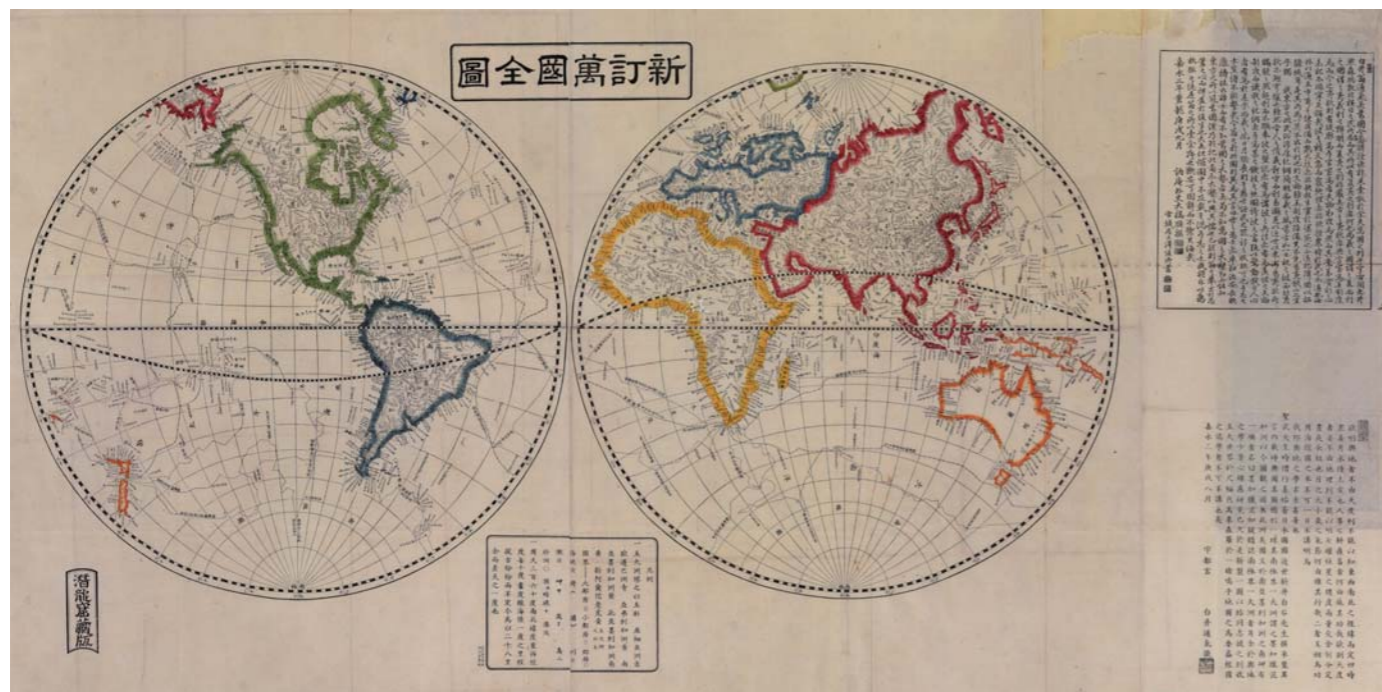




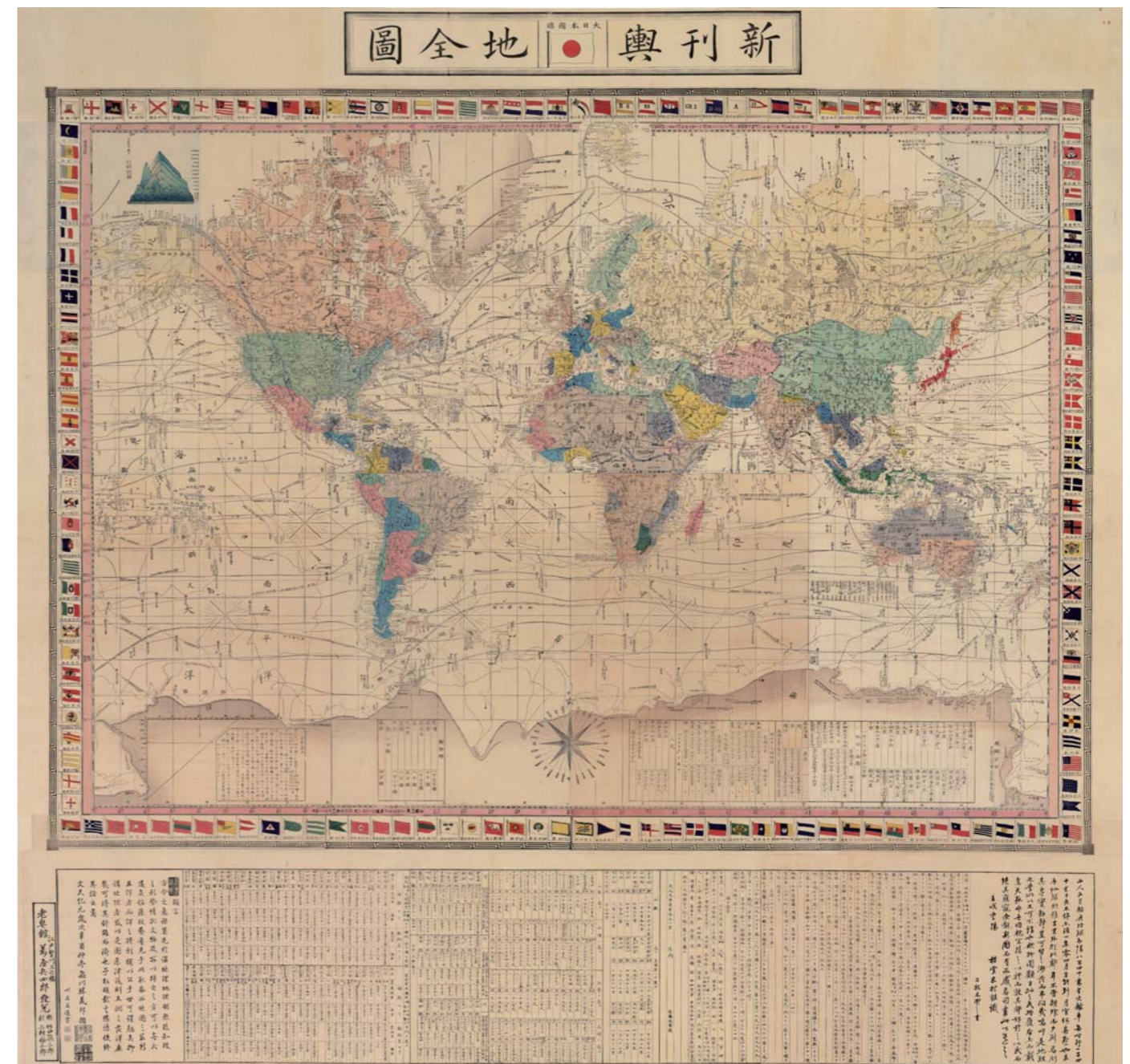
8 山海輿地全図 天明5年(1785)頃



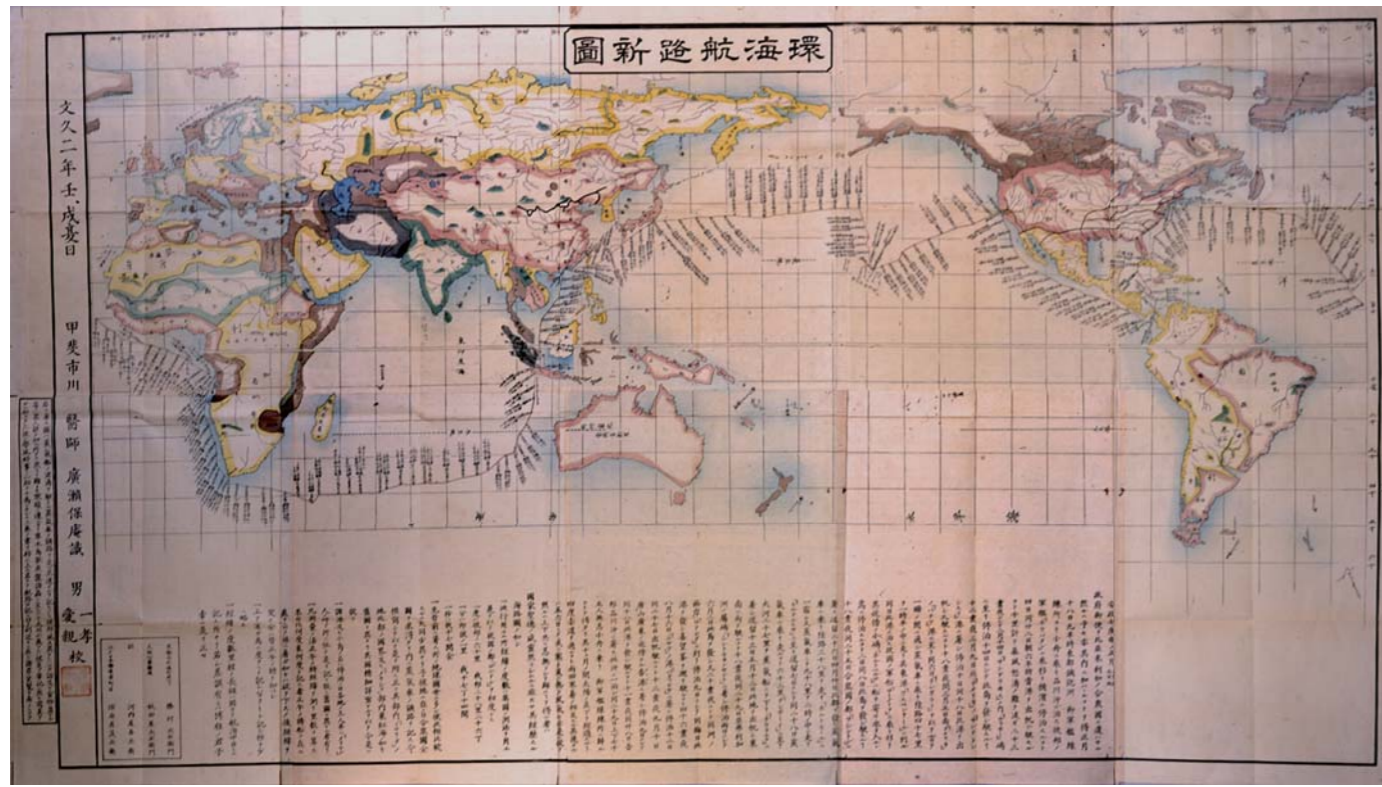
10 万国輿地全図 嘉永4年(1851)



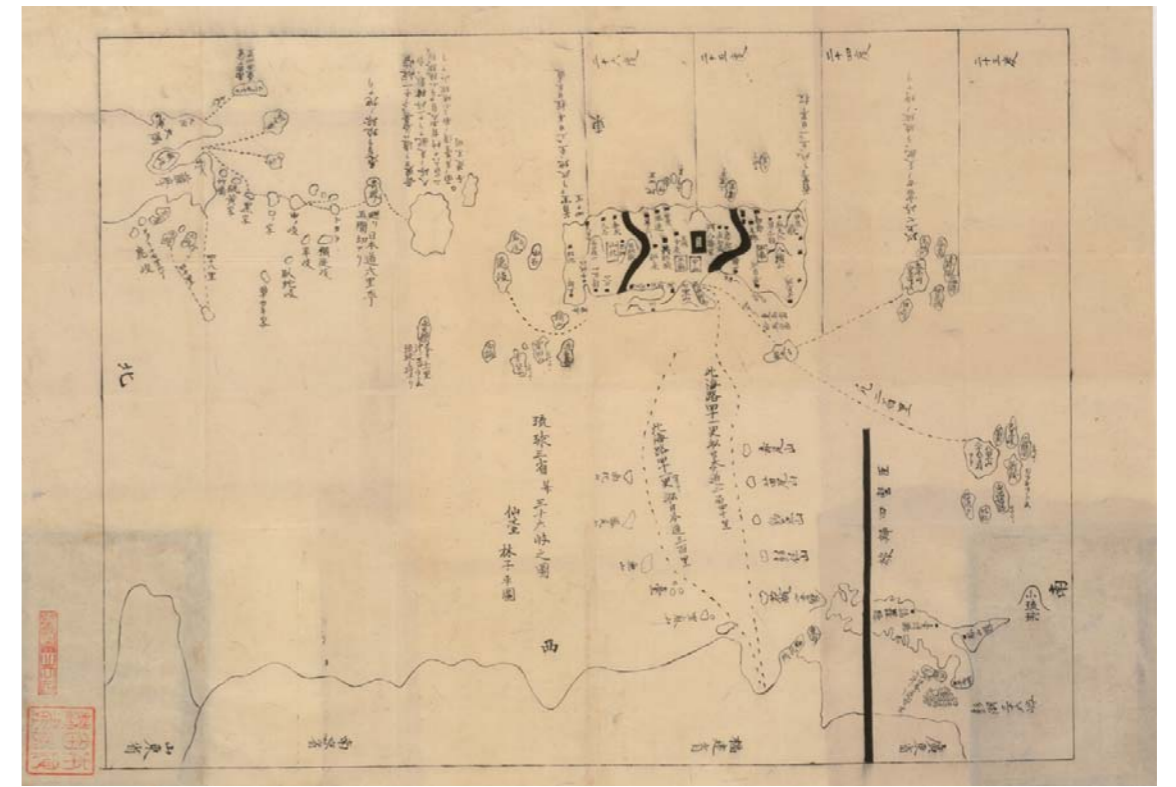
9 新訂万国全図 嘉永3年(1850)



11 新刊輿地全図 文久元年(1861)



12 環海航路新圖 文久2年(1862)



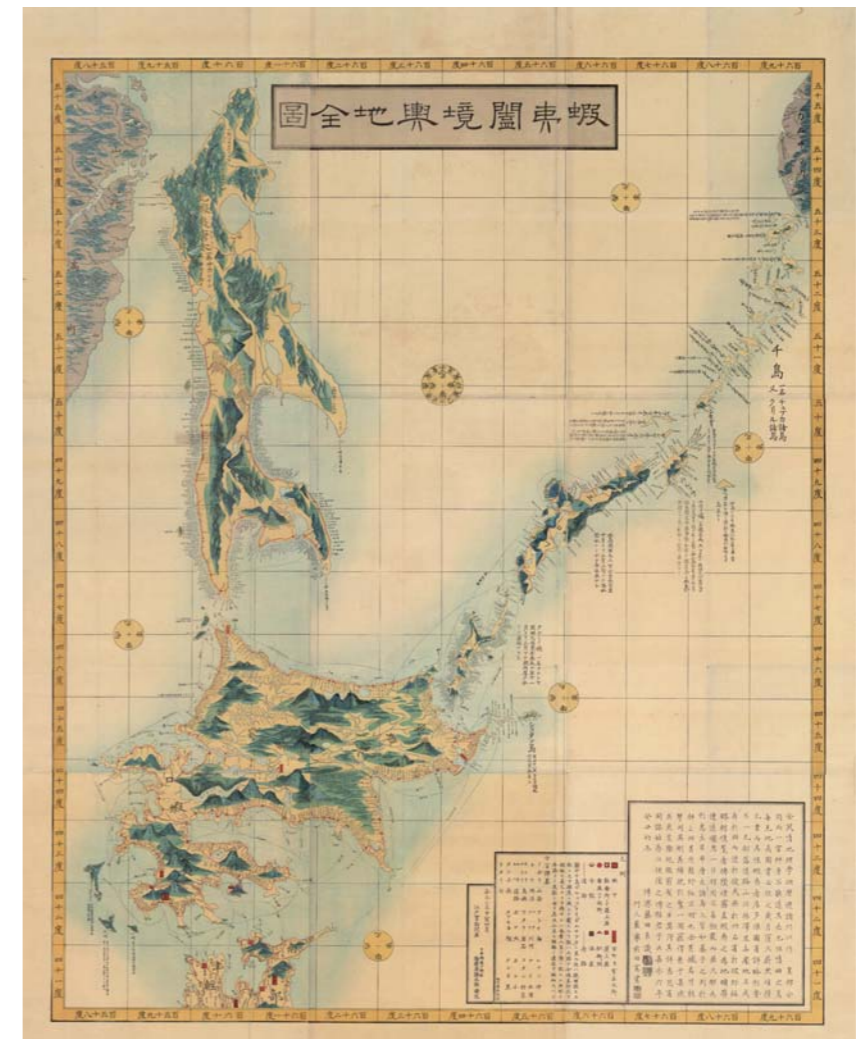
15 琉球三省并三十六嶋之圖 天明5年(1785)



13 朝鮮地図 江戸時代中期



14 朝鮮八道之圖 天明5年(1785)



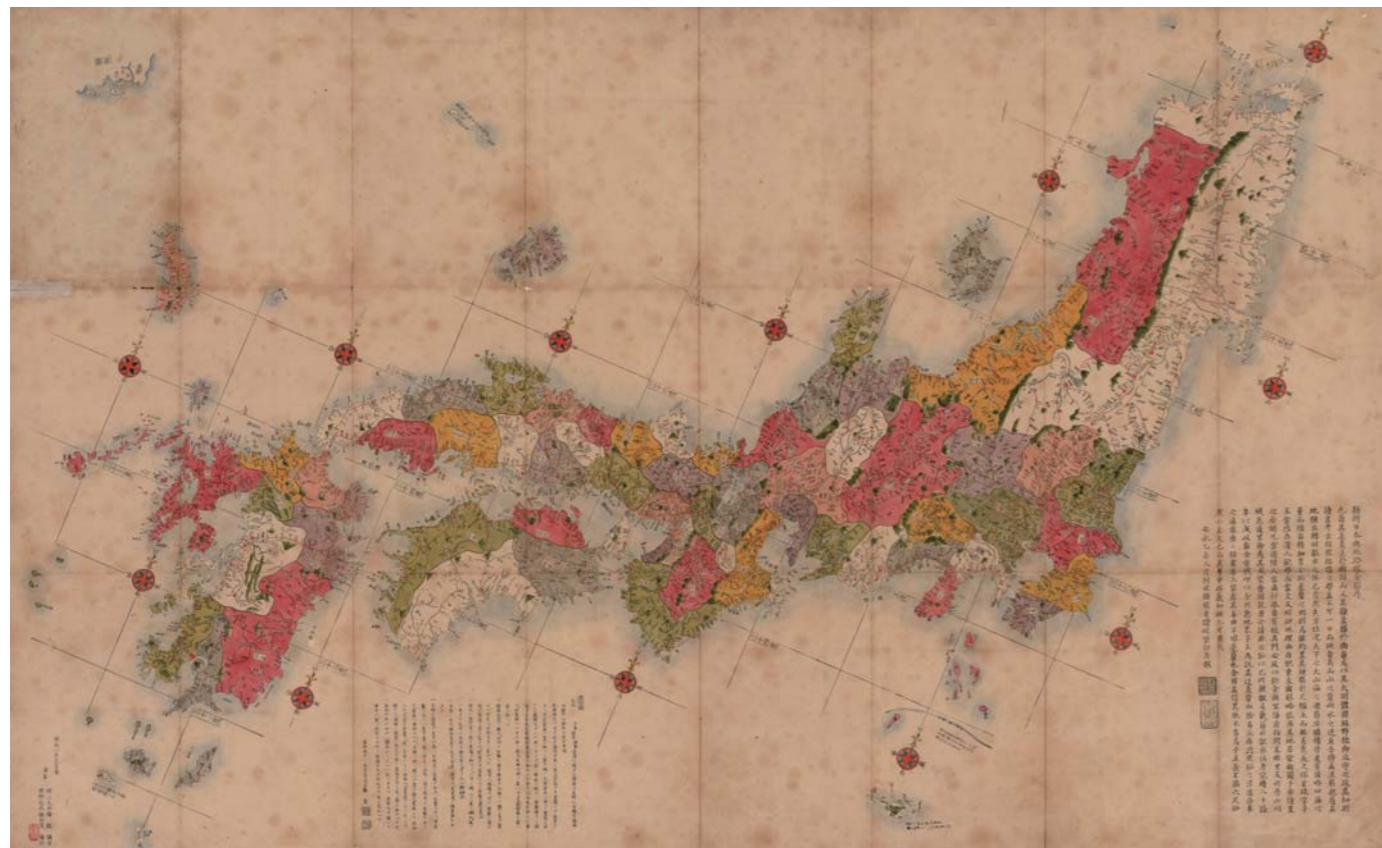
17 蝦夷閩境輿地全圖 嘉永7年(1854)



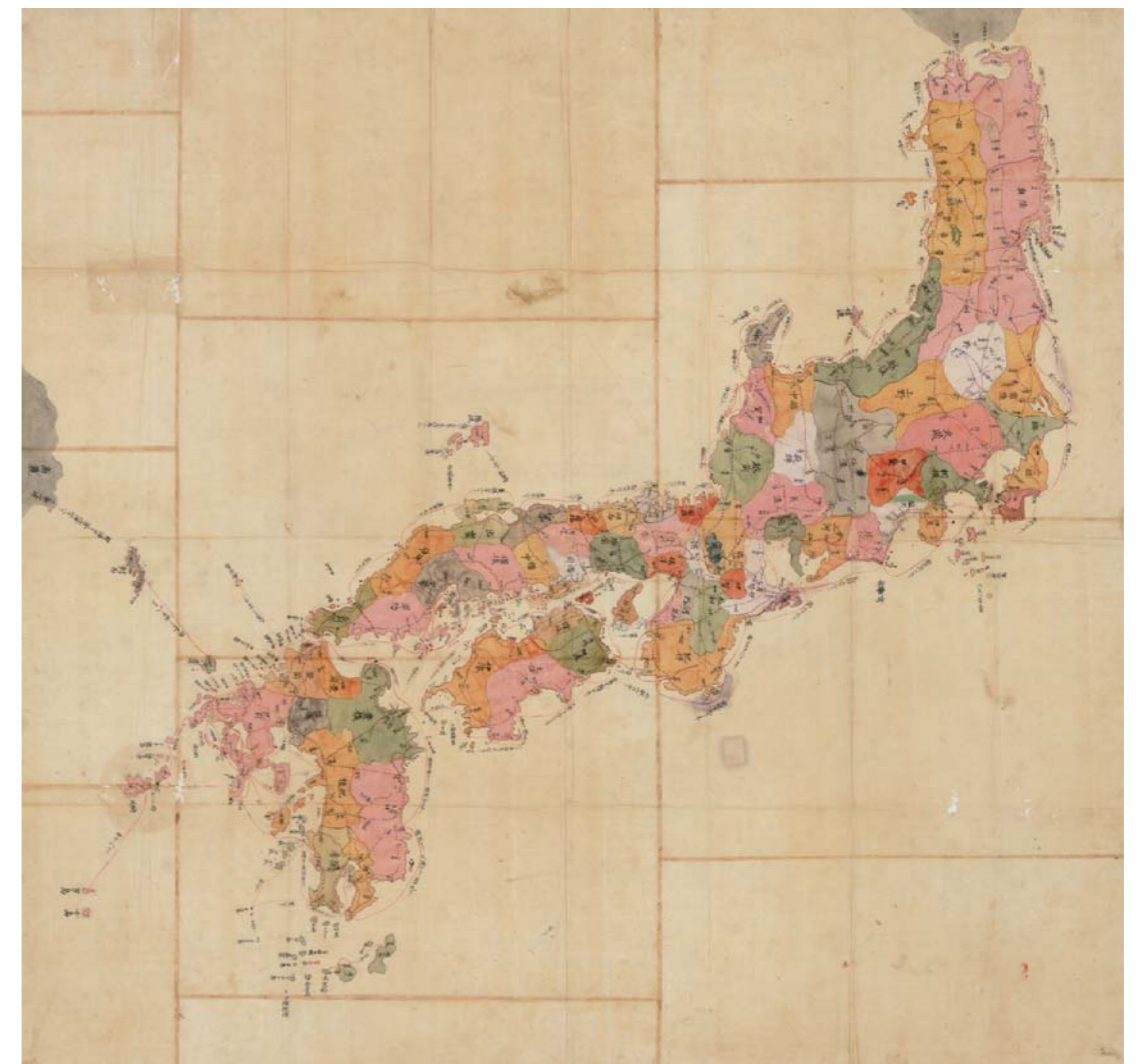
16 蝦夷国全圖 天明5年(1785)



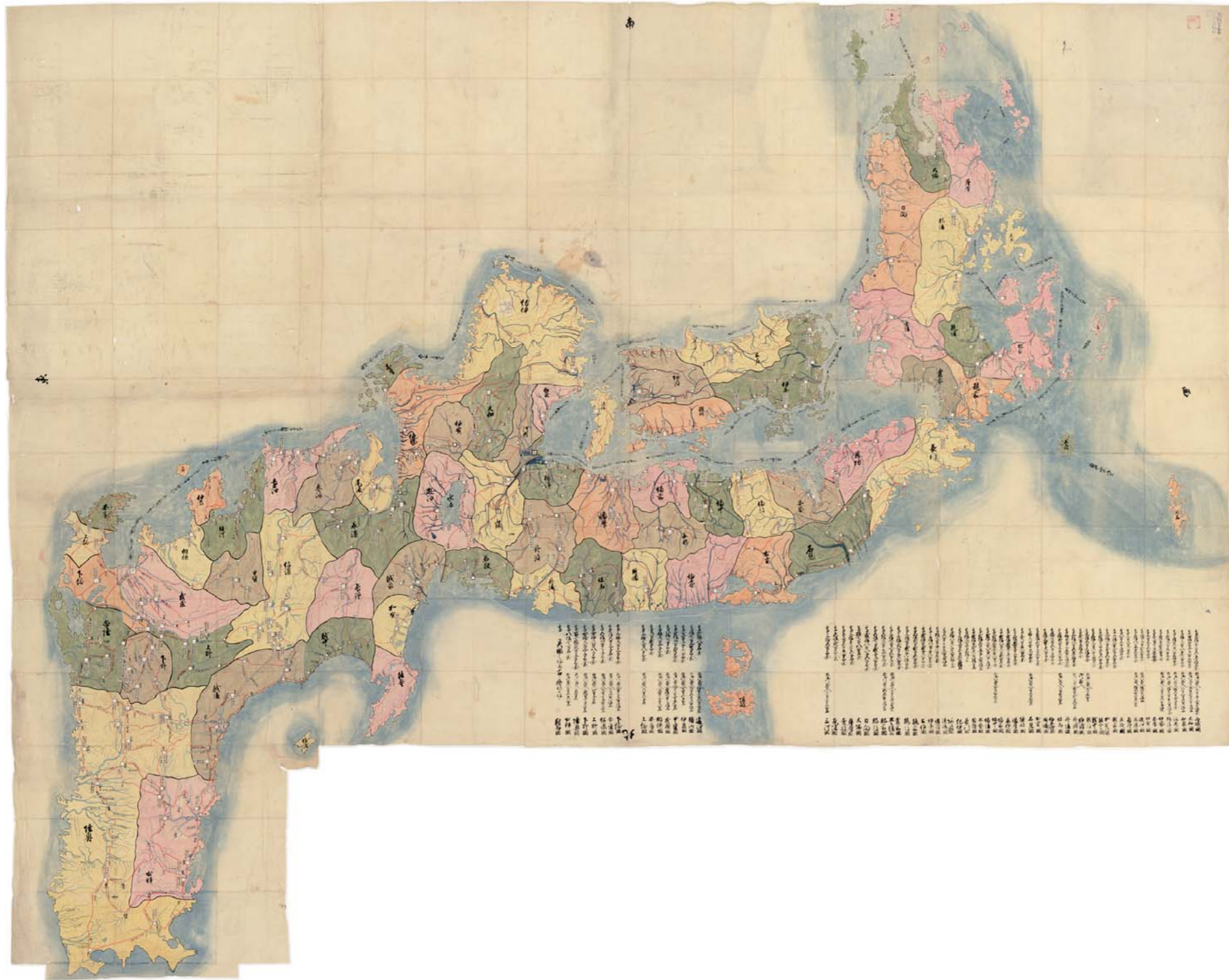
18 日本国総図 江戸時代前期



19 日本輿地路程全圖 安永8年(1779)



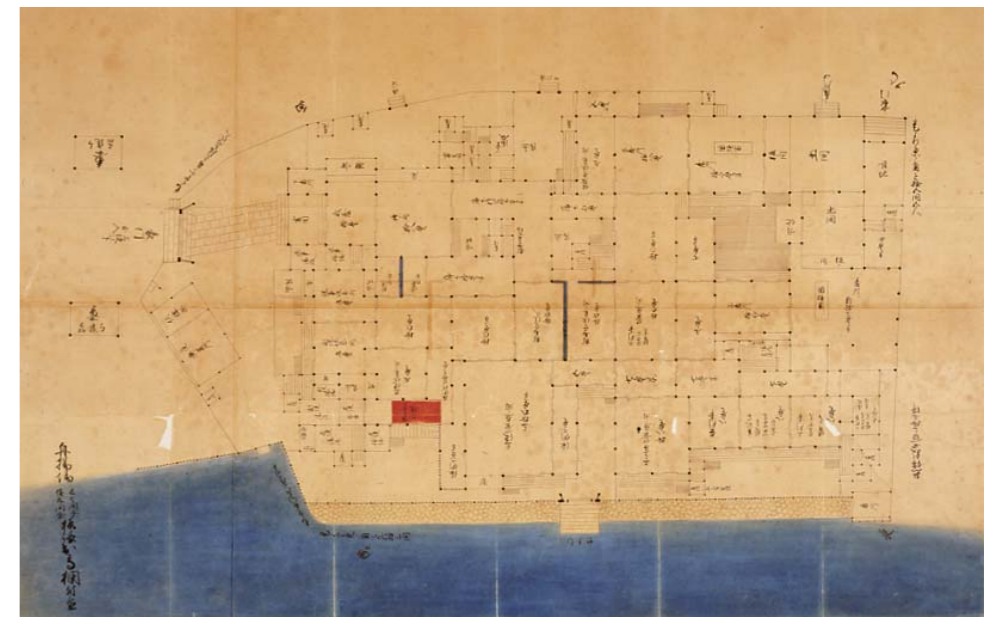
20 日本図 享保6年(1721)



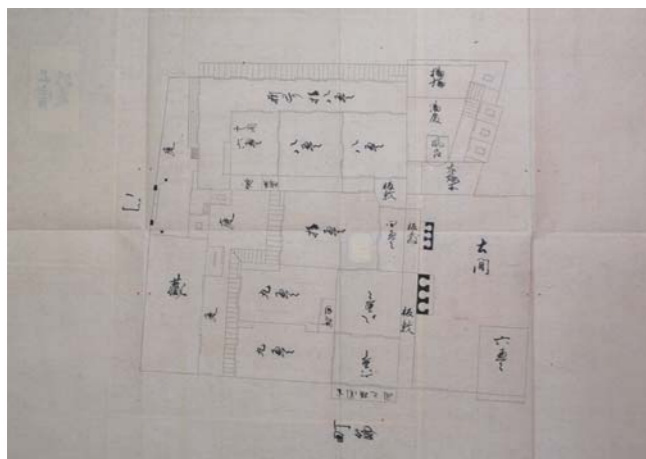
参考 日本大絵図（複製） 寛永年間(1624～44)



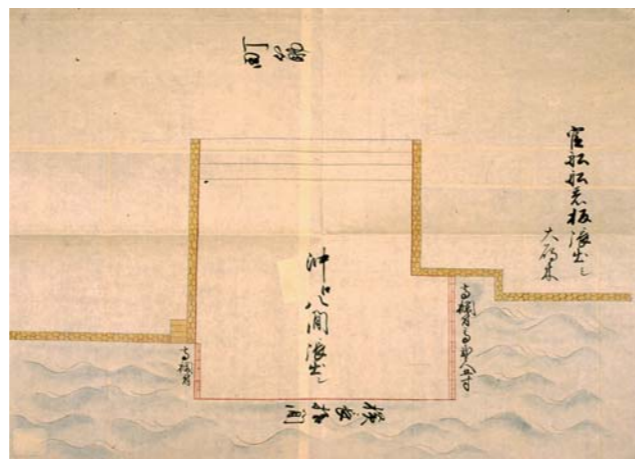
21 邑久郡牛窓町筋絵図 正徳元年(1711)



22 御茶屋絵図 正徳元年(1711)



23 上官次官舎絵図 延享5年(1748)

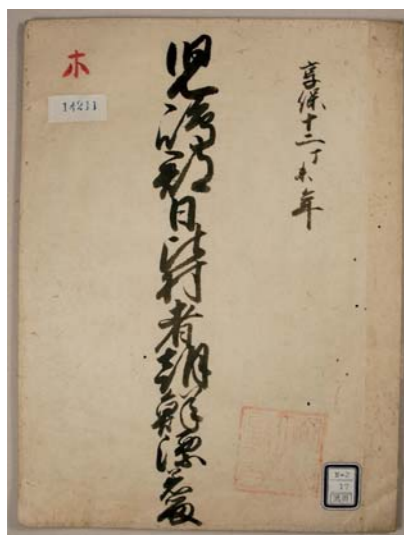


24 官船船着板張出シ大雁木絵図 延享5年(1748)

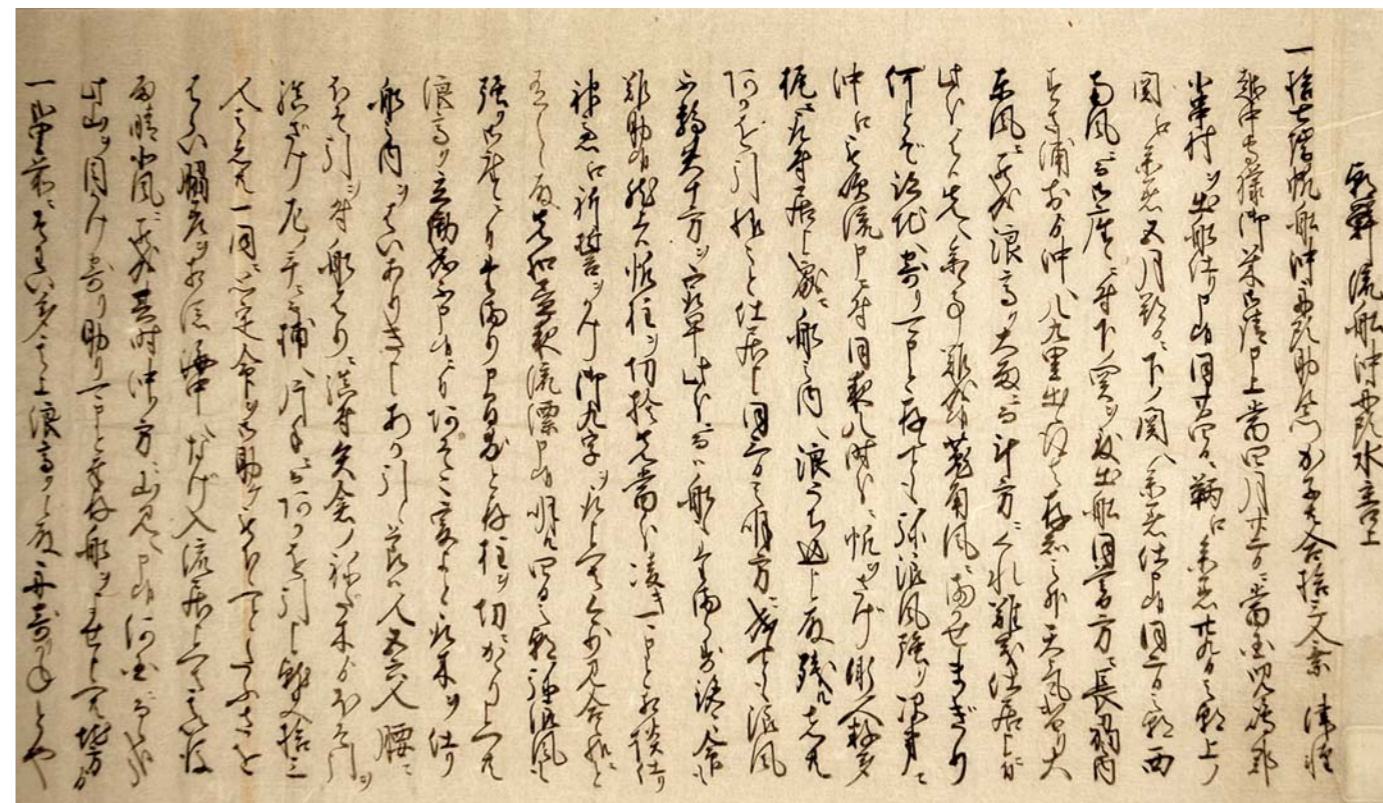
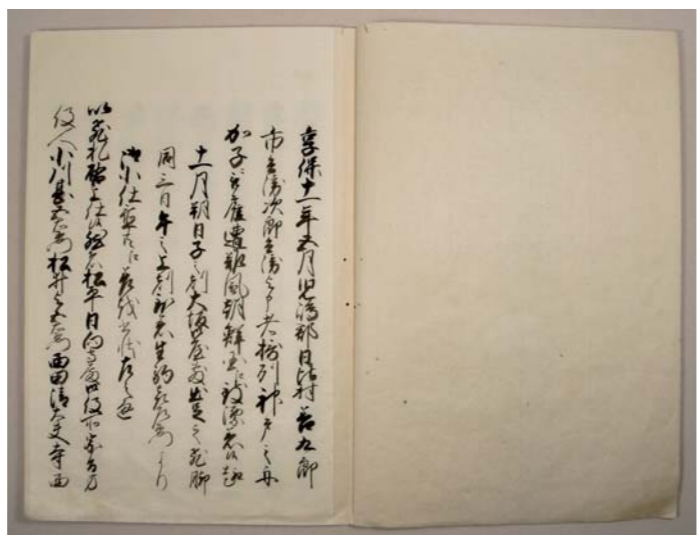
写真提供：岡山県立博物館



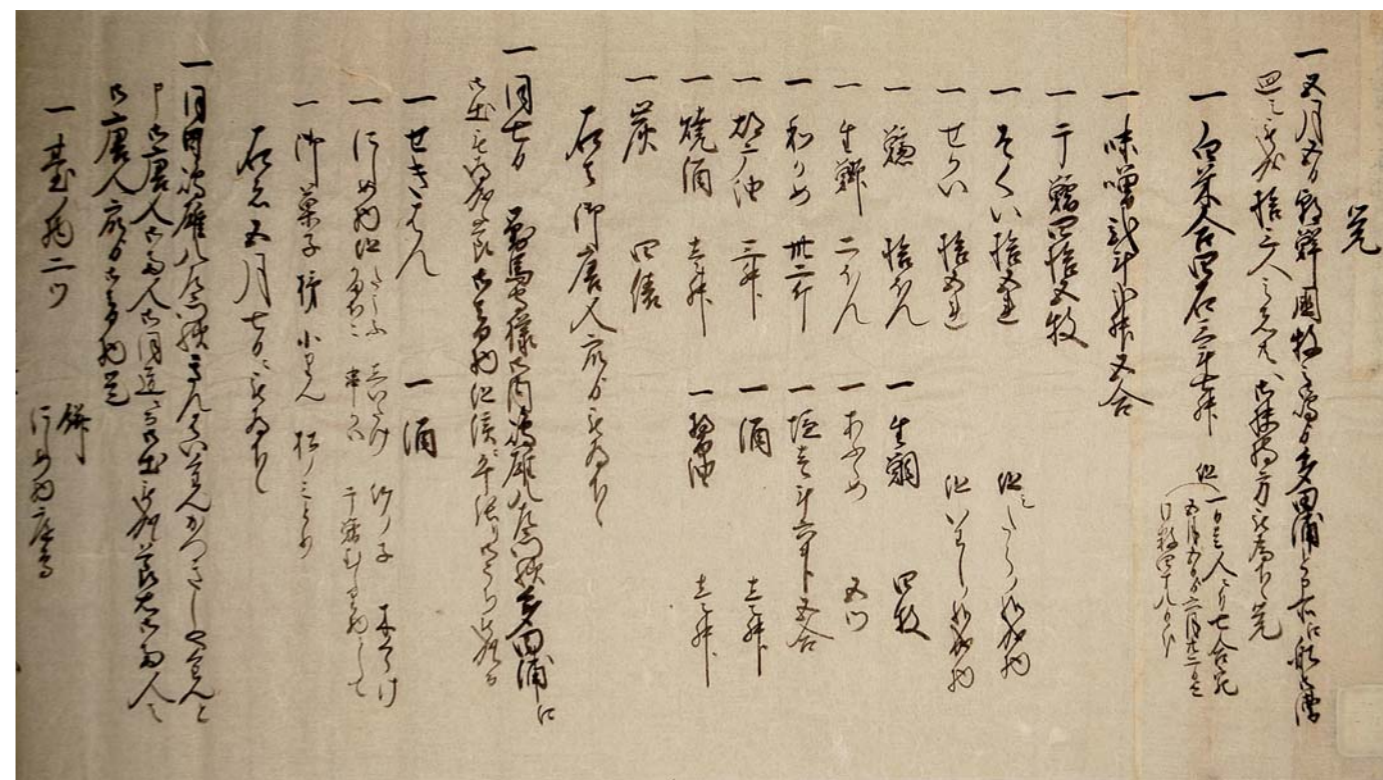
25 朝鮮人御用留帳 享保4年(1719)



28 児嶋郡日比村者朝鮮漂流留 享保12年(1727)



26 朝鮮流船船頭水主口上(部分) 元禄5年(1692)



27 覚(部分) 元禄5年(1692)

平成 20 年度 企画展 池田家文庫絵図展
日本と「異国」

江戸時代の外交

江戸時代は「鎖国」の時代といわれる。しかし、それは幕末期に日本がヨーロッパ諸国に「開国」したこととの対比で言われることであって、実際には、朝鮮・琉球との「通信」の関係、オランダ・中国との「通商」の関係があり、アイヌとのあいだにも外交に擬せられた関係が存在していた。

江戸時代の外交は「4つの口」の外交と呼ばれる。外国との交渉や交易の窓口が限られていたからで、朝鮮に対する対馬、琉球に対する鹿児島、中国・オランダに対する長崎、アイヌに対する松前が、その「4つの口」であった。それぞれの「口」では、現地の大名や町に外交事務が委任され、それに対する給付として貿易の独占が認められた。あわせて、日本人の海外渡航は禁止されたから、一般の日本人が外国や外国人と接触することはほとんどなく、外国に関する情報も極めて限られたものとならざるをえなかった。

江戸の世界像と世界図

室町時代までの日本人の世界についての認識は、「三国世界観」と言われる。これは仏教とともに広まった観念で、世界は天竺（インド）・震旦（中国）・本朝（日本）の3つからなるというものであった。しかし、この世界像は戦国時代にヨーロッパ勢力が来日することで大きく変わる。彼らは東南アジアを拠点として来航したから「南蛮」と呼ばれた。キリスト教の宣教師を中心とした「南蛮人」が列島各地で生活するようになり、朱印船が派遣された「南蛮」の国々は「日本人町」も作られた。

こうした状況は、徳川幕府が反キリスト教の立場から「鎖国」政策に転じたことによって終わる。しかし、「南蛮」の記憶は強く残ったから、「鎖国」下の日本人の世界認識は、「南蛮・中国・日本」という新しい「三国世界観」として再編された。寺島良安の『和漢三才図会』の「異国」像は、その典型であった。この新しい「三国世界観」に対応した世界図は、イェズ会宣教師のマテオ・リッチが中国で作成した「坤輿万国全図」であった。そこには、大航海時代のヨーロッパ人の世界像と中国の伝統的な空想的世界像とが混在している。この時期の世界図は地球を楕円形に描くもので、とくに南半球の知識が不足していた。

この「坤輿万国全図」系統の世界図は、18世紀中頃になると木版大判で刊行されるようになり、当時の日本人の世界像を支えるものとなった。地理学者の長久保赤水が校訂して天明5年（1785）頃に刊行された「地球万国山海輿地全図」は代表的なもので、以後も版を重ねて広く普及した。

なお、18世紀の初めに密入国した宣教師のシドッチを尋問した新井白石は、その新しい知識に基づいて『西洋紀聞』や『采覧異言』を著した。白石は『坤輿万国全図』が必ずしも信ずるに足りないことをシドッチの証言から確信し、より現実的な世界像を得ていたが、その知識が一般に広く普及することはなかった。

また18世紀後半に列島の北辺でロシアとの緊張が強まると、海防を強化する立場から蝦夷地など北方への関心が高まった。こうした動向を代表するのが、林子平が天明5年（1785）に著わした『三国通覧図説』である。この書は、日本に隣接する朝鮮国・琉球国・蝦夷地の地理を概説したもので、付録に付けられた3国の絵図も簡略なものであったが、本文から独立して林子平の三国図として普及した。

西洋学術の普及と世界図

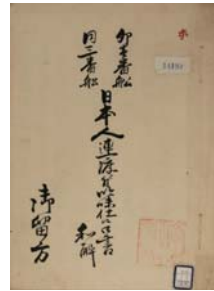
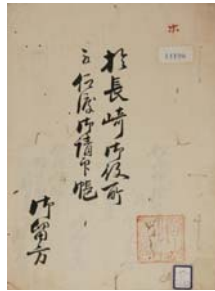
18世紀後半になると、ヨーロッパの学術が蘭学として日本に流入するようになる。そのなかで最新の地理書や世界図が直輸入され、それまでの楕円形世界図に替わって、両半球を双円形に描く世界図が作られるようになる。その最初は司馬江漢が寛政4年（1792）に刊行した「地球全図」で、これは銅版で作られた最初の地図でもあった。

この双円形世界図は、幕府の天文方や蕃書和解御用による官許の世界図としても刊行された。

津山藩医の眞作家となった眞作吾吾が弘化元年（1844）に刊行した「新製輿地全図」は、小版の木板刷りであったが、巻子仕立てで扱いやすかったために広く普及した。なお、同じ頃に幕府の命によって外交資料集『通覧一覽』が編集される。来るべき「異国」との外交交渉に備えたものであった。

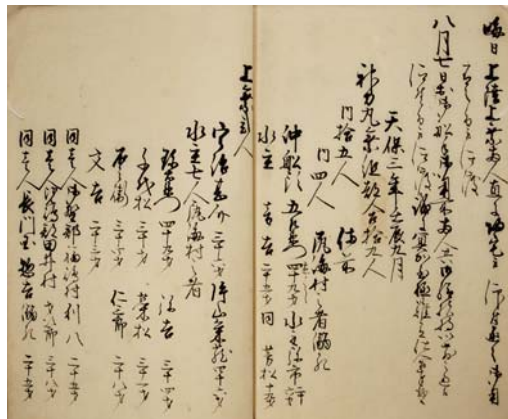
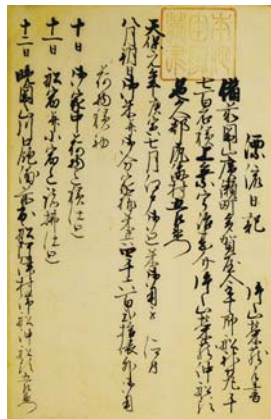
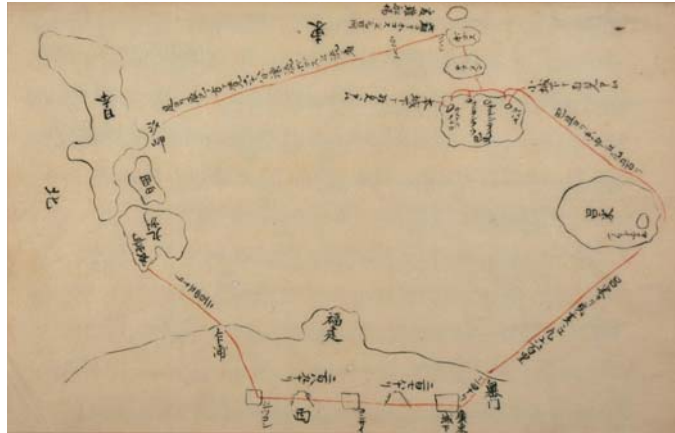
他方、19世紀中頃には、世界周航の航路が表示しやすい方形世界図も作成されるようになる。これはいわゆるメルカトル図法によるもので、経線が等間隔であるのに対して緯線は緯度が高くなるほど広げて表現された。最初の方形世界図は、弘化3年（1846）に永井則が作成した「銅版万国輿地方図」で、これは1839年にイギリスのロンドンで発刊された地図をもとにしたものである。ヨーロッパの最新の地図が数年で日本において翻刻されていることには驚かされる。時代は大きく転換していた。

いわゆる「開国」後は、日本人の欧米渡航も始まる。その最初は、徳川幕府が万延元年（1860）に派遣した遣米使節であるが、これに随行した医師の広瀬保庵は、自分たちの世界一周の航路を書き込んだ「環海航路新図」を刊行した。これもメルカトル図法による方形世界図で、欄外には世界一周の行程が詳しく記されている。また、2回目となった文久2年（1862）の遣欧使節には、福沢諭吉が同行した。福沢は帰国後にその体験に基づいて『西洋事情』を著している。この書は幕末・維新时期にベストセラーとなり、ヨーロッパの政治・産業・思想・文化についての知見を人びとの間に広めた。



29 漂流人口書其外品々之写 天保3年(1832)

30 漂流人一件 天保3年(1832) (左:包紙 右:漂流経路)



31 漂流日記 天保3年(1832) (左:初述 右:神力丸漂流者の名前・年齢等の記録)

江戸の日本図

江戸時代より前の時代の日本図は、一般に「行基図」と言われている。行基との関係は伝承にすぎないが、俵のような形の六〇余国を貼りつないだように列島を描く点は共通しており、図の天地は南を天にするものが多い。現存する最古の日本図は、嘉元3年(1305)の年紀を持つ仁和寺所蔵のものであるが、この図も典型的な「行基図」の形をとっている。現実の列島の形状とはかけ離れた空想的なものである。

江戸時代になると、徳川幕府によって全国の国絵図が作成されるようになり、提出された国絵図を集成して幕府が日本図を作るようになる。最初の国絵図作成は家康の慶長年間(1596～1615)のことだが、この事業が完成したかは定かでもなく、それに基づく慶長日本図の存在についても、意見が分かれている。

ついで家光の寛永年間(1624～44)に、諸国に派遣された巡見使によって国絵図が収集され、これに基づいて寛永日本図が作成された。この寛永日本図は二種類のもの知られる。列島の形状もほぼ現実に近づいているが、「行基図」の雰囲気もかすかに留めている。

統一的な基準に基づく国絵図作成は、正保期(1644～48)に実現する。正保の国絵図は全国一律の縮尺で調製されたから、それをつなぎ合わせた正保日本図はかなり正確なものとなった。その後も幕府は、国絵図を作成することに日本図を作成したが、蝦夷地についてはいずれも現実とは大きく異なるままであった。蝦夷地を含めた列島北辺の地図が正確に描かれるようになるのは、近藤重蔵が参加した寛政10年(1798)の幕府による蝦夷地調査以降のことである。しばらくして、正確な測量に基づく伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」が作成される。

幕府が作成する日本図は極めて大型であったが、民間では、それを参考に作られた小型の日本図が木板刷りで普及した。その初期の事例は、貞享4年(1687)に刊行された石川流宣作の「本朝図鑑綱目」で、慶長日本図か寛永日本図をもとに作成されたものと考えられている。宿駅や名所の案内など実用性も加味されていて、何度も版を重ねて流布した。

次に流行したのは長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」で、安永8年(1779)に刊行された。正保日本図を参考にしたと思われ、経緯線を書き込んだ点に特徴があった。正確な日本図として評判も高く、明治初期まで利用された。

〈異国〉としての朝鮮

江戸時代の「4つの口」の外交のうちでは、朝鮮国との関係がとくに重要であった。当時の両国の関係は基本的に対等なもので、その善隣友好を確かめるために朝鮮国王の使節が徳川将軍のもとに送られた。使節の派遣は12回に及んだが、そのうち最初の3回は徳川将軍の国書に対する回答と豊臣秀吉の朝鮮出兵によって連行された朝鮮人被虜を

刷還するための「回答兼刷還使」と呼ばれ、4回目からは親善友好を目的とした「通信使」となり、以後、徳川将軍の代替わりごとに派遣された。

使節の一行は釜山から大坂までは海路を、大坂から江戸までは陸路を通行する。幕府は各地の大名に使節一行の接待を命じた。接待の内容は、領内通行中の安全の確保、食料の提供、接待場での饗応、などであった。岡山藩は、牛窓での饗応を中心に接待を行った。福岡藩の場合であるが、接待費用は現在の時価にして4億6,000万円もかかったという。

牛窓では、使節と岡山藩の儒者との間で詩文の贈答など文化的な交流が行われた。また接待の御用のために延べ2,000人ほどの船乗りが動員されたが、彼らは朝鮮人の姿を間近に観察することができた。通信使一行を一目見ようと、多数の民衆が領内の各地から押し寄せた。彼らには、物見遊山の気分が満ちていた。朝鮮通信使の通行は、「鎖国」の時代に日本の民衆が〈異国〉を感じる貴重な機会であった。

岡山藩の漂流民

「鎖国」体制のもとで日本人の海外渡航は基本的に禁止されていたから、民衆が実際に外国の地を踏むことができたのは漂流体験くらいであった。当時の船は風まかせの帆船で、航海技術も十分に発達していなかったから、暴風風に巻き込まれて遭難することは避けられなかった。いわゆる西廻り航路・東廻り航路が開発されて国内の海上交通が発達する江戸時代中期には、漂流事件が頻発するようになる。

漂流民が漂着する先は、朝鮮や中国が最も多かった。この両国とは外交関係が存在していたから、漂流民を相互に保護・送還する体制が調っていた。朝鮮に漂着した日本人は現地の住民や政府の役人によって丁寧に扱われた。とくに漂流民の側に朝鮮通信使の接待を体験したことがある場合には、朝鮮人との摩擦もなく滞在生活は穏やかなものであった。

東南アジアの島々に漂着した場合は、現地での言葉の不便や帰国までの手順が複雑で、苦労が絶えなかった。しかし、〈異国〉での見聞や体験は、民衆に日本とは異なる世界を知らせるとともに、日本について改めて自覚させる機会ともなった。国内の人びとも、漂流民の体験談や漂流記録によって、〈異国〉についての知識を与えられた。

(岡山大学社会文化科学研究科 倉地克直)

参考文献

- 秋月俊幸 『日本北辺の探検と地図の歴史』
北海道大学図書刊行会、1999年
- 川村博忠 『近世日本の世界像』
ぺりかん社、2003年
- 国絵図研究会編 『国絵図の世界』 柏書房、2005年
- 倉地克直 『漂流記録と漂流体験』
思文閣出版、2005年

展示資料解説

展示資料解説の表記は、番号、資料名、作成年、池田家文庫整理記号、法量、解説の順に記した。各資料名には、よみを記した。

1 地球全図

ちきゅうぜんず

寛政4年(1792)

M0-6 55.2 cm × 89.6 cm

司馬江漢が作成した銅板刷りの双円形世界図。表紙外題は「地球図」。江漢は、洋画の実用性を評価し、蘭書によって腐食銅版画の技法を研究し実作した。原図はフランス語版の世界図といわれる。図の余白には、地動説に基づく日食・月食の図や南極・北極の図、グリーンランドや二角獣の図、サフランなどの南方植物の図など雑多な海外知識が盛り込まれている。

2 新製輿地全図

しんせいよちぜんず

弘化元年(1844)

T10-22 35.3 cm × 138.8 cm

實作省吾が作成した木板刷り卷子仕立ての双円形世界図。幕府天文方の高橋景保が作った「新訂万国全図」をもとに、天保6年(1835)にフランスで刊行された世界図による最新の地理情報を盛り込んだもの。大槻磐溪の題言がある。六大州と世界の国々の領土を色分けで示している。

3 銅版万国輿地方図

どうばんばんこくよちほうず

弘化3年(1846)

T10-17 33.6 cm × 120.4 cm

永井則が作成した銅版刷りの方形世界図。卷子仕立ての小型版で、解説は漢文で記す。天保10年(1839)にイギリスで刊行された双円図を永井が方図に書き換えた。方図では極地が表現されないため、それを補うために双円図が添えられている。題辞は安積良斎。世界各地の寄港地がカタカナでびっしりと書き込まれている。

4 和漢三才図会 卷13・14

わかんさんさいずえ

正徳3年(1713)

O31-16~18 25.2 cm × 17.7 cm

大坂の医師寺島良安が編集した百科事典。中国・明の『三才図会』をもとに、日本の古典や独自の見解を加えて著した。世界地理に関する記述は、巻13 異国人物・巻14 外夷人物で扱われている。

5 西洋紀聞

せいようきぶん

正徳5年(1715)頃

P21-162 23.8 cm × 16.4 cm

日本に密入国したイタリア人宣教師シドッチを尋問した新井白石が、それによって得た知識などに基づいて著した書。世界地理についても最新の知識が盛り込まれていたが、長く新井家に秘蔵されていた。寛政5年(1793)に幕府に献上され、以後写本として広まった。本書は後記から三好清が文化3年(1805)に写したものであることが分かる。

6 通航一覽

つうこういちらん

嘉永6年(1853)

210-1-17 26.6 cm × 18.4 cm

徳川幕府が嘉永3年(1850)に大学頭林健(壮軒)らに命じて編纂した。永禄9年(1566)から文政8年(1825)までの外交関係資料を収める。その後、続輯の編纂も行われ、安政3年(1856)頃に完成した。正編が322巻・附録23巻、続輯が152巻・附録26巻からなる大部なもので、江戸時代の外交についての基本資料集となっている。池田家文庫の正編写本は、全12冊の内2冊が欠けている。

おくぐんうしまでもちすじえず
21 邑久郡牛窓町筋絵図

正徳元年 (1711)
T12-96 97.0 cm × 139.5 cm
朝鮮通信使接待のために作られた絵図。牛窓の町屋と朝鮮使節(三使・上々官・上官・次官・中官・下官)・宗対馬守・以訥庵長老などの宿割りしゆくわりが示されている。御茶屋東隣の御用屋敷に「下濃七助しものしちすけ」と書き込みがあり、それによって正徳元年の接待に際して作られたものであることが分かる。

おちややえず
22 御茶屋絵図

正徳元年 (1711)
C7-200 73.4 cm × 117.6 cm
通信使接待のために、御茶屋内の部屋割りや屏風の配置などを記した絵図。「伊予守休息ノ間」という書き込みから、伊予守(池田綱政)の来臨が予定されていた正徳元年の接待に際して作られたものと思われる。後に改築された建物と比べると、南の海手側に座敷が張り出していて、建坪はかなり広い。朱で塗られたところは、「上段 国書置場」と書かれており、朝鮮国王から徳川将軍にあてられた国書を安置する場所であった。

じょうかんじかんしゃえず
23 上官次官舎絵図

延享5年 (1748)
C7-206 50.0 cm × 69.7 cm
通信使の宿舎に使われる町屋の絵図。御茶屋絵図2枚、宿舎絵図6枚、船着場絵図5枚が袋に入れられている。事前に宿見分に訪れた対馬藩の役人に提出されたものと思われる。

かんせんふなつきいたはりだしおおがんぎえず
24 官船船着板張出シ大雁木絵図

延享5年 (1748)
C7-198 35.7 cm × 49.8 cm
使節一行が上陸するために設けられた船着場の絵図。高さ2尺5寸(約75cm)の高欄付きであった。設置されたのは御茶屋のやや西。21 邑久郡牛窓町筋絵図にもその場所が図示されている。

ちょうせんじんごうとめちよう
25 朝鮮人御用留帳

享保4年 (1719)
C7-252~268 27.5 cm × 20.2 cm
畳紙入り全17冊。「宿検分一件」「御馬鷹一件」「御馳走之品々」「下行一件」など、接待御用の内容ごとに冊子がまとめられている。御用が無事に済んだ後に、後の参考になるようにと、藩の留方が関係書類を編纂したもの。具体的な接待の内容とともに、幕府や対馬藩との遣り取りについても詳しく知ることができる。

ちょうせんせんせんだうかここうじよう
26 朝鮮流船船頭水主口上

元禄5年 (1692)
N2-110-1 28.0 cm × 302.4 cm
沖船頭助左衛門ほか12人が、朝鮮に漂流した顛末を岡山藩役人に語った口上書。朝鮮に滞在したのは、48日間。帰国にあたって催された送別の宴の主催者は「はきどくじ」という役人であったが、彼は天和2年(1682)の通信使に随行して日本に行った経験の持ち主であった。「その時の牛窓での歓待が忘れられない」と言って、助左衛門たちに5献も酒を勧めてくれた。助左衛門たちもその厚遇に感激したと語っている。

おぼえ
27 寛

元禄5年 (1692)
N2-110-2 28.0 cm × 189.4 cm
端裏貼紙に「真木屋惣三郎舟朝鮮漂着之次第覚書」とある。滞在中に朝鮮役人から与えられた毎日の食料、送別の宴の献立、帰国にあたって「はぎとくじ」から贈られた土産品、などが書き上げられている。懇切丁寧な接待の様子がよく分かる。

こじまぐんひびむらものちょうせんひょうりゅうとめ
28 児嶋郡日比村者朝鮮漂流留

享保12年 (1727)
N2-17 27.4 cm × 20.4 cm
摂津神戸の俵屋善六船に水主として乗り組んでいた児嶋郡出身の善九郎・市兵衛・次郎兵衛の3

人が、朝鮮漂流の次第を語った記録。朝鮮滞在は89日間。従来の漂流民は帰国後に他所へ出掛けることが禁止されていたが、このたびの者たちは幕府から他所稼ぎも勝手次第と許された。朝鮮国との関係が安定するなかでの緩和措置であった。

ひょうりゅうにんくちがきそのほかしなじなのうつし
29 漂流人口書其外品々之写

天保3年 (1832)
S6-97~105 28.0 cm × 20.4 cm
文政13年(1830)に起きた岡山の神力丸がフィリピンのパターン諸島に漂着した事件の一件記録。神力丸の乗組員は19人、うち14人が無事帰国した。岡山藩領内の者は11人。この史料は、彼らが3年後に帰郷した後に藩の留方によってまとめられたもので、9冊が畳紙に包まれている。うち1冊は漂流民受け取りの経緯を記した国元の留帳で、他の8冊は長崎奉行所が作成した調書を「極内々」に筆写したものである。

ひょうりゅうにんいっけん
30 漂流人一件

天保3年 (1832)
S6-106~113 28.2 cm × 20.5 cm
岡山藩の江戸留守居が作成した神力丸漂流事件の一件記録。8冊袋入り。うち1冊は江戸留守居が長崎奉行や国元との遣り取りを記した留帳、残りの7冊は長崎奉行所の調書の写し。留方本で2冊に分かれているものを1冊にまとめたものがあるために総数は少ないが、内容は同じである。後に国元に送られ、留方の管理になった。

ひょうりゅうにっぎ
31 漂流日記

天保3年 (1832)
P29-28 27.3 cm × 19.3 cm
神力丸に上乘として乗り組んでいた岡山藩の楯取片山栄蔵の手記。役人による調書や他人による問書ではなく、漂流民自身が手書した記録は極めて珍しく貴重である。栄蔵は、漂流民を代表して現地の住人や役人と交渉しており、その記述は他と比較しても信頼性の高いものである。冷静な〈異国〉観察が印象的である。

にほんおおえず
[参考] 日本大絵図

寛永年間 (1624~44)
T10-4 360.5 cm × 456.0 cm
国立国会図書館所蔵の「日本総図」と同系統の絵図。徳川幕府は寛永10年(1633)に諸国巡見使を派遣しており、川村博忠は、その巡見使が収集した国絵図を集成して作成された日本図と推定している。川村はまた、島原半島の地名が他と比べて異常に詳しい点に、寛永15年(1638)の「島原の乱」後の政治状況を見ている。国ごとに色分けし、城地は□印、その他の地名は○印、道路は朱線、海路は白線で示す。里数や渡河情報も細かく記されている。畳紙部分に国ごとの石高とそのうちの蔵入地(幕府領)の高を書き上げる。城地には多数の押紙が付けられ、正保元・2年(1644・45)頃の領主名が記されている。

展示資料目録

番号	資料名	数量	年代
1	地球全図	1枚	寛政4(1792)年
2	新製輿地全図	1巻	弘化元(1844)年
3	銅板万国輿地方図	1巻	弘化3(1846)年
4	和漢三才図会 巻13・14	2冊	正徳3(1713)年
5	西洋紀聞	1冊	正徳5(1715)年頃
6	通航一覧	1冊	嘉永6(1853)年
7	西洋事情	1冊	慶応2(1866)年
8	山海輿地全図	1枚	天明5(1785)年頃
9	新訂万国全図	1枚	嘉永3(1850)年
10	万国輿地全図	1枚	嘉永4(1851)年
11	新刊輿地全図	1枚	文久元(1861)年
12	環海航路新図	1枚	文久2(1862)年
13	朝鮮地図	1枚	江戸時代中期
14	朝鮮八道之図	1枚	天明5(1785)年
15	琉球三省并三十六嶋之図	1枚	天明5(1785)年
16	蝦夷国全図	1枚	天明5(1785)年
17	蝦夷闔境輿地全図	1枚	嘉永7(1854)年
18	日本国総図	1枚	江戸時代前期
19	日本輿地路程全図	1枚	安永8(1779)年
20	日本図	1枚	享保6(1721)年
21	邑久郡牛窓町筋絵図	1枚	正徳元(1711)年
22	御茶屋絵図	1枚	正徳元(1711)年
23	上官次官舎絵図	1枚	延享5(1748)年
24	官船船着板張出シ大雁木絵図	1枚	延享5(1748)年
25	朝鮮人御用留帳	17冊	享保4(1719)年
26	朝鮮流船船頭水主口上	1通	元禄5(1692)年
27	覚	1通	元禄5(1692)年
28	児嶋郡日比村者朝鮮漂流留	1冊	享保12(1727)年
29	漂流人口書其外品々之写	1冊	天保3(1832)年
30	漂流人一件	1冊	天保3(1832)年
31	漂流日記	1冊	天保3(1832)年
参考	日本大絵図(複製)	1枚	寛永年間(1624~44)

池田家文庫絵図展・記念講演会開催記録

(絵 図 展)

年度	展示テーマ	会 期
平9	絵図にみる岡山城	1997年10月23日~11月1日
平10	岡山藩と海の道	1998年10月23日~11月1日
平11	後楽園と岡山藩	1999年10月23日~11月1日
平12	備前慶長国絵図のふしぎ	2000年10月23日~11月1日
平13	岡山藩江戸藩邸ものがたり	2001年10月23日~11月1日
平14	開けゆく岡山平野 岡山藩の新田開発(1)	2002年10月23日~11月1日
平15	新田開発をめぐる争い 岡山藩の新田開発(2)	2003年10月23日~11月1日
平16	岡山城下町をあるく	2004年10月23日~11月1日
平17	江戸時代の岡山 池田家文庫絵図名品展	2005年9月29日~10月10日
平18	戦さと城	2006年10月26日~11月12日
平19	陸の道	2007年11月16日~12月2日
平20	日本と「異国」	2008年11月1日~11月16日

(記念講演会)

年度	記念講演会演題	記念講演会講師	期 日
平9	絵図を読む	岡山大学文学部 教授 倉地克直	1997年10月25日
平10	瀬戸内の交流	岡山県総合文化センター 総括学芸員 竹林榮一	1998年10月23日
平11	日本庭園と後楽園	岡山大学農学部 教授 千葉喬三	1999年10月23日
平12	江戸幕府の国絵図事業	東 亜 大 学 教授 川村博忠	2000年10月28日
平13	岡山藩の江戸藩邸	東京大学史料編纂所 教授 宮崎勝美	2001年10月23日
平14	津田永忠と岡山藩の土木事業	岡山大学環境理工学部 教授 名合宏之	2002年10月26日
平15	近世の境界論争と裁判	東京大学史料編纂所 助教授 杉本史子	2003年10月23日
平16	岡山城下町を掘る ~絵図と遺構~	岡山市デジタルミュージアム 開設事務所 乗岡 実	2004年10月23日
平17	池田家文庫絵図の見方	岡山大学文学部 教授 倉地克直	2005年10月 1日
平18	「長久手合戦図屏風」の世界	茨城大学人文学部 教授 高橋 修	2006年10月26日
平19	江戸時代の陸上交通	岡山県立記録資料館 館長 在間宣久	2007年11月23日
平20	「鎖国」の中の日本と朝鮮	名古屋大学文学部 教授 池内 敏	2008年11月 1日

年度は開催年度 平成16年度までは「池田家文庫等貴重資料展」、平成17年度から「池田家文庫絵図展」
平成9年度~平成16年度は岡山大学附属図書館、平成17年度からは岡山市デジタルミュージアムで開催

謝 辞

本展の開催にあたり、下記の機関・関係者の皆様に多大なご協力を賜りました。
ここに記し、感謝の意を表します。

大阪歴史博物館
岡山県立博物館
コンテンツ株式会社
佐賀県立名護屋城博物館
東北大学附属図書館
(財)蘭島文化振興財団

浅野慎太郎
浦川 和也
大澤 研一
小野 博
沼田 幸子

平成 20 年度 企画展 池田家文庫絵図展

日本と「異国」

発行日：平成 20 年 (2008) 11 月 1 日

主 催：岡山大学附属図書館・岡山市デジタルミュージアム

発 行：岡山大学附属図書館

〒700-8530 岡山市津島中 3-1-1

TEL 086-251-7322 FAX 086-254-6152

岡山市デジタルミュージアム

〒700-0024 岡山市駅元町 15-1

TEL 086-898-3000

印 刷：アイプリックス株式会社

〒700-0064 岡山市大安寺南町 2 丁目 1-3

TEL 086-253-5161